

敬愛大学総合地域研究所 第10回公開シンポジウム報告

東京2020オリンピック・パラリンピックで 千葉をどう変える？

国境を超え、バリアを超え、世代を超えて



敬愛大学経済学部教授

根本 敏則

はじめに

本日は、敬愛大学総合地域研究所主催のシンポジウムにご参加いただき、大変ありがとうございます。私は、本日の司会を担当いたします、根本でございます。よろしくお願いいたします。それでは、最初に、私のほうから、本シンポジウムの開催趣旨について、簡単に説明させていただきます。

まず、時代背景ですけれども、2020年には、65歳人口が3.2人に1人になります。30年には、それが2.5人に1人になると予想されています。高齢者が増えるわけです。それから、障がい者。現在、人口の6.7%ですけれども、これも、増加すると思われています。

2017年に内閣府が、障がい者に関する世論調査を行いました。その結果によると、「障害に対する偏見は依然、高い」とはいえ、「理解を深めたい」という意欲もまた高いということがわかりました。すなわち、障がい者に対する理解を深めるための行事や催し物に、6割以上の方が、「ぜひ参加したい。機会があれば参加したい」と回答しており、特に若者や女性に多いことがわかりました。2020年に開催されるパラリンピックに期待される効果は、

このパラリンピックを契機として、日本の障がい者への施策や取り組みを向上することです。すなわち、2020年東京大会のレガシーとして、共生社会の実現を目指していきたいということでもあります。

文部科学省も、学習指導要領を改訂して、全ての子どもたちに、「心のバリアフリー」を指導することとなっております。もちろん、そのためには、全ての先生が「心のバリアフリー」を理解していかなければなりません。教員免許を取得する際に、特別な支援を必要とする幼児、児童および生徒に対する理解という科目を設定し、その履修を義務付けているところであります。

ですから、東京2020年オリ・パラ開催を契機に、千葉をどういうふうに変えていくかをわれわれは考えていく必要があると思います。千葉市も、共生社会実現を謳っております。敬愛大学の建学の精神は、敬天愛人でございます。「この世に生を受けたことを、神に感謝して、人に優しく接していこう」というわけです。

実は、この4月に、敬愛大学経済学部にも、配慮を必要とする学生が入学しております。先日の教授会で議論になったのですが、地震が

きたときに、どのようにその学生を避難させるのかということが問題になりました。というのも、障害の関係で、車いすが非常に重たいものなのです。その学生本人だけを地上に避難させても車いすと一緒に持っていかなければ動けない。教授会で、やはり、車いすも、協力して運んでいかなきゃいけないということがわかったわけです。我々、普段から敬愛愛人と言っているわけですが、実際の問題を

考える中で、共生のあり方ということが一つずつわかってくるんだなということを、痛感したわけであります。

今日は、このシンポジウムをきっかけに、共生のあり方を考えていきたいわけですが、ゲストスピーカーを3人、お招きしております。3人の講演をお伺いした後、フロアの皆さまと、ディスカッションもしていきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

ねもと・としのり Toshinori Nemoto

第10回公開シンポジウム

「東京2020オリンピック・パラリンピックで千葉をどう変える？ ——国境を超え、バリアを超え、世代を超えて」

令和元年7月13日(土) 13:30～15:30

於 敬愛大学稲毛キャンパス3号館3301教室

〈プログラム〉

開会挨拶：根本 敏則（敬愛大学経済学部教授）

第1部

講演① 「東京2020大会に向けて——千葉市の取り組み」

貞石 渡（千葉市オリンピック・パラリンピック調整課課長）

講演② 「東京2020パラリンピックの成功へ向けて——共生社会実現への道」

高橋 秀文（公益財団法人日本障がい者スポーツ協会常務理事・日本パラリンピック委員会副委員長）

講演③ 「みんなでつくる参加する東京2020——生涯スポーツ社会の実現へ向けて」

馬場 宏輝（帝京平成大健康医療スポーツ学部准教授）

第2部 パネルディスカッション

報告 「大学生のパラスポーツ体験への取り組み——敬愛大学を例として」

藤森 孝幸（敬愛大学地域連携センター室長）

パネリスト：熊谷俊人（千葉市長）、高橋 秀文、馬場宏輝、藤森 孝幸

コーディネーター：藪内 正樹（敬愛大学経済学部教授）

閉会挨拶：三幣 利夫（敬愛大学学長）